

公益財団法人 河川財団 河川基金だより

# RIVER FUND

Oct. 2021

45

特集

学びの場としての川の魅力



河川  
基金

川を愛する人のために

# 河川浄化チャレンジ月間 “クリーン5”で水質改善を目指す

芦田川環境マネジメントセンター  
広島県福山市

芦田川環境マネジメントセンターは、福山河川国道事務所、福山市と連携して、芦田川の水質浄化に取り組む“芦田川きれい☆きれいプロジェクト”として『河川浄化チャレンジ月間』を、毎年11月の1か月間実施しています。芦田川流域にお住まいの方には、スマートフォン、はがきなどで参加登録をしていただき、協力小中学校・自治会や団体には“アクションシート”の記入をお願いしました。さらに水切りネット等を配布して、家庭のできる水質浄化の5つ

の取組み“クリーン5”を1か月間実践、取組み状況をサイト、アクションシートに記録していただきます。2020年度は、取組み前、取組み中の2回の水質調査を行ったところ改善が見られ、実施結果を参加された皆様に配布、ホームページ等で公開。アンケートでは多くの方が「取組みを継続したい」と回答しており、水質改善の契機になったと思っています。取組みの継続と共に、他支川の流域でも活動を広げて行きたいと考えています。

“芦田川きれい☆きれいプロジェクト”の子どもたちを対象にした体験学習会の様子。  
水質や生き物の調査も行っています。



河川基金は、『芦田川環境マネジメントセンター』を応援しています！

河川基金へのご寄付は  
全国の川をより良くする活動へと  
つながっています。



河川  
基金

# INDEX

## 04

### 特集

## 学びの場としての川の魅力

- 08 「河川基金」助成の募集を開始
- 10 河川基金助成事業の募集にあたって
- 12 河川財団賞および河川財団奨励賞の募集を開始
- 13 河川美化・緑化事業の募集を開始

## 14

### INTERVIEW

## 河川基金助成の現場から



14

インタビュー①  
e-plus 生涯学習研究所 代表 小林由紀子さん

### 川のアクティブラーニング

～E S D (持続可能な開発のための教育)で取り組む「川の学び方」～



17

インタビュー②  
川崎市立井田小学校かなで分教室 室長 本生拓郎さん

### 多摩川・鶴見川の姿が語ってくれること

～流れる水の働き・大地のつくりとその変化を追究する子どもたち～



20

インタビュー③  
京都大学防災研究所 特定准教授 渡部哲史さん

### 水害が過疎化の進展に及ぼす影響の解明

— 京都大学防災研究所 —

23

ご寄付の御礼

表紙写真



江川せせらぎ遊歩道(あぜの道)

【提供】

川崎市立井田小学校かなで分教室

江川雨水貯留管(江川せせらぎ遊歩道地下埋設)  
<https://www.city.kawasaki.jp/800/cmsfiles/contents/0000084/84115/egawa-choryu.pdf>

学びの場としての

# 川の魅力

自然豊かな地でも、都市にあっても、川はその地域に癒しの場と、水の恵みを与えてくれる存在。その一方で、川は災害や水の恐ろしさを私たちに教える場でもあります。学校教育においても、環境、社会的な役割、科学的な理解、防災など、さまざまな角度から「川に学ぶ」プログラムが、多くの学校で行われています。教材としての河川の魅力とはどのようなものなのか、河川教育に携わる方々に伺いました。



## プロフィール

多摩市立連光寺小学校(東京都)  
講師

松田一枝さん(写真右)

2004年から2020年まで多摩市立連光寺小学校に勤務し、地域の特色を生かした学習活動の研究に関わってきた。2015年に4年生の担任となり、多摩川の自然を生かした学習活動をESDや他教科との連携の視点から行うなど、生徒の自発的な学びの力を育成することを目指して活動。

教育連携コーディネーター

羽澄ゆり子さん(写真左)

大学修了後、(株)野生動物保護管理事務所研究員勤務を経て、2002年より連光寺小学校に教育活動指導職員として勤務し学習支援に携わる。現在は教育連携コーディネーターとして学校と地域を結びながら、河川、森林環境教育の支援を行っている。理科講師兼務。

川でどんなことが学べるの？

東京都・多摩市にある連光寺小学校では、約20年にわたって「多摩川」で河川教育を行ってきました。子ども達にとっても大人達にとっても「川は魅力的な学びの場である」と話す、元教諭の松田一枝さんと、教育連携コーディネーターの羽澄ゆり子さんに「川で学べること」とは何かをまず伺いました。

「私たちが学びの場として  
いる多摩川は、人がたくさん  
住む中に流れる都市河川  
です。ここで学べることの  
ひとつは、まずは人と川と  
の関わりだと思えます。川  
というものは、太古から流域  
の人々の暮らしの基盤を作  
り、治水などによって産業  
を作り、交通なども担って  
きたものですから。また、  
飲み水や排水、再生など水  
循環について、外来種も含  
めた生態系のこと、海洋プ  
ラスチック汚染などの環境  
課題……。4年生の社会科に



河川学習では、川の中に入る機会も多い

おける学習で新しく「自然災害から身を守る」という単元ができましたから、水害対策を考えるためにも最適な教材です。釣り糸を垂らせば魚が釣れるように、多摩川に糸を垂らすとスルスルっといろいろな教材が出てくる。昨年を最後に私は定年をむかえましたが、学べることは本当に山のようにあつて、多摩川を中心とした『多摩川学』という学問ができるぐらいだなと思っています」（松田さん）

「20年ほど前（1998年）に始まった『総合的な学習の時間』で、4年生は環境的な内容を取り入れようということになりました。そこで先生たちが地域の教材を探し、多摩川はどうか」と検討し始まったものなんです。最初は1回、2回のつもりだったのですが、どうせなら魚を捕ろう

と。そうして20年経ってもまだやっているのです（笑）。それでも、多摩川から学べるということのは尽きません。

子ども達にとつては、とにかく水に触れること自体が楽しいようですね。川の中で石を並べてみるとか、堰き止めてみるとか。そこに魚を捕まえる仕掛けを作ってみるとか、ただ川で過ごすだけで十分豊かな時間になっています。そういう経験があるからこそ、川が楽しい場所だと知ることができるし、一方で怖い場所であるということもわかる。そういういろいろな体験を、子ども達にはしてほしいなと思っています」（羽澄さん）

「もちろん水が怖いとか、生き物が苦手な子もいます。でもそういう子も含めて多摩川のことはみんな大好きなんです。水が流れて、風が感じられて。そういう自然空間の気持ちよさは誰でも感じられるのです。水が苦手な子が川で何に興味を持つかというと、石を調べたり、河原の植物を調べたり、鳥を調べたりするんです。最近、面白かったのは、川で聞こえる『音』を集めた子がいたことです。水が流れる音、滝のような音もあれば、鳥の声もある。だから河川での学習とひと言で言っても、子ども達は本当にさまざまなことを拾い上げてきます。またしばらく行けない時が続くと、たまたまなく、多摩川に行きたい」という気持ちが膨らむんですね。目の前を大きな川が流れるあの風景に会いにいききたい、そういう川のある風景を思う気持ち。それはもしかしたら先祖から受け継いだものなのかもしれません。

それじゃあ「ゴミ拾いに行くか!」と言うと、教室では全然「ゴミ拾いなんか嫌がる子が喜々として



子ども達が自ら学ぶ意欲を引き出す

拾います。川のある空間は、やはり子どもにとつても魅力的なんだなあと感じます。学習においては自分で興味のあることを選べるということのも大事ですね。教室で座って勉強するのが苦手な子や、九九が苦手と言えない子も、すごく専門的な石の名前を自主的に調べていたりします。多摩川にはそれだけ子どもを変えるポテンシャルがある。その事実にもいつも驚かされます」（松田さん）

「先生達にとつては、子ども達の変化を目の当たりにできるのが、川に向かうモチベーションになるようです。教室ではじつと座ってられない子が、川の学習を通して、喜々として図鑑を調べたりするようになる。その変化が学校生活にも影響してくると、『やった!』と思いますね。また、今の子ども達は、思いきり石を投げるといふ経験がないの

で、ボールすら、なかなか投げられない。だからもし時間を取れるなら、授業でも、何をやってもいいよ” って言ってあげられるといいですよね。 ” 対岸に誰もいないならずっと石を投げていてもいいよ” と言ってあげたい” (羽澄さん)

### 河川学習の安全対策

科学的、社会的、環境的、さまざまな視点での学びができる河川。では、河川学習を行う上での安全対策はどのような点に留意するべきなのでしょう。

「気候変動の影響が大きい近年においては、まずは暑さ対策です。河原には日射しを遮るものがないので、テントを持って行ったり、川に近い学校にお願いをして着替える場を提供してもらったりはしていますが、行くまでの間に熱中症にならないかどうかかなり気に掛けています。また、現地の下見をすることはすごく大切です。その日水の中に入っても大丈夫かどうかの確認はもちろんですが、行くまでのルートは大丈夫かなども、複数回に亘り確認します。また学習前後の健康チェックや、水分などの持ち物は大丈夫か、具合が悪くなった子にどう対応するかなど、表に見えない安全対策は非常にたくさんあります」(松田さん)

「あとはアレルギー対策も重要です。河原はブタクサやイネ科の植物などがものすごく多いので、ほぼ通年、植物アレルギーを持つ子どもにとっては危険な場合があります。重度のアレルギーの子がいる場合には親御さんと連絡を取りながら行っ

たり、授業を見に来てもらったりすることもあります。水中の活動に関しては、ライフジャケットはもちろん着用するのですが、着用するとけっこう暑いですね。暑さが厳しい場合、水温もそこまで低くない上に水の中は疲れやすいので注意が必要です。装備には必ず経口補水液、冷却用の氷、アイスパックなどを用意します。今ほとんかく熱中症対策が重要課題です。現場での活動時期も7月は避けるようにしています」(羽澄さん)

### 川がつなぐ「人脈の宝物」

川は非常に魅力のある教材である一方、ひとつのクラス、ひとつの学年が「行きたい」からといってすぐに行ける場所ではありません。安全対策や準備など、人手も必要な学習を、連光寺小学校ではどのように実現させてきたのでしょうか。

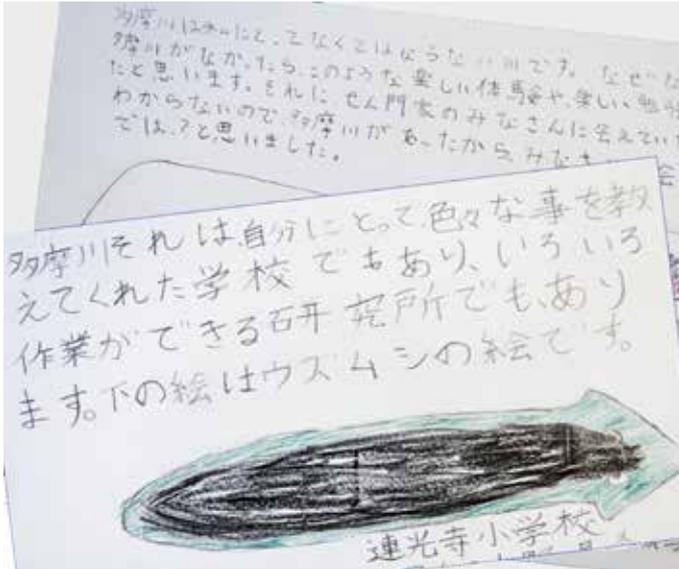
「連光寺小学校が河川教育を続けられる理由のひとつに、お手伝いしてくれている人たちとの関係性を作ってきた経緯があります。それは羽澄先生がコーディネーターとして入ってくれていたことも大きな理由ですね。『水辺の楽校(※)』の方たちが学校だけではこぼれてしまう部分をかなり見守ってくれています。また、羽澄先生が植物観察や鳥の観察などの専門家を、ゲストとしていろいろ連れてきてくださっています。釣りの上手な用務主事さんに来ていただくこともありますね(笑)。保護者の方に安全対策で来てもらうこともありますし、護岸整備や環境コンサルなどを行う会社の方がいろいろとサポートしてくれることもありました。安全の面でもそうだし、子ども達の学びの

追究としても、決してひとつの学校でできることではなく、地域と連携してやっていかないと難しいですね。それがネックではありますが、社会教育の場として、川を通していろいろな立場の方と結びついていくのは理想でもあると思います。川は人間の生活と密接にかかわってくるからこそ、教員も新たなつながりを作ることができます。そういう面では大人にとっても学びがありますね」(松田さん)

「上流から下流まで、さまざまな人が関わっているからこそ、川がその方々とのつながりを作り出してくれたとも言えます。その人脈は川の支流のようにいろいろなところに流れ込んでいて、”じゃあ、あれはあの人に頼めばいいのかな”とアイデアにつながっています。だから授業をコーディネーター



水の流れや水質の調べ方を協力者に教えてもらう様子



多摩川を学ぶことで、地域を愛する心を育む

するのはすごく楽しいですね。逆に私自身が役に立てることがあれば手伝いに行きます。そんな風に、川がつかないでくれた人脈の宝物ができあがっていききました。今は難しくても、ゆくゆくは子ども達同士も交流ができれば面白いなと思っています」(羽澄さん)

### 子ども達の原風景を作りたい

学びの場である以前に、川という場所自体がとても魅力的であると話すお二人。子ども達にとって、河川での学びがどんな糧になってほしいと考えているのでしょうか。

「河川学習をする際、雨が降った翌日は、増水していないかどうか、朝6時半ぐらいに、羽澄先生

と現場に行つて確認するのですが、その朝の光景は美しすぎて今でも忘れられません。動物たちが集まり、鳥たちは朝ごはんを食べていて、それが朝靄に包まれている。何だか今思い出しても涙腺が緩むような光景で(笑)。私たちが心から自然に感動した思いを子ども達にも伝えたいし、それを子ども達が受け取ってくれたと思えた時、小さなガッツポーズを積み重ねていきます。子ども達がこんなことに気づけたよって言ってくれると、やってよかったなと思うし、大人になって川を見た時に、その経験がよみがえって、その時の生活の支えになってくれたらいいなと思います。生物の多様性やゴミの問題、水の問題というものもいろいろやってきたので、もしかしたら忘れてしまふかもしれないけど、それが生活の中にひょこっと顔を出してくれたら。自分自身も教育を通して川の魅力を感じているので、川に対してアンテナを立てていきたいなと思います」(松田さん)

「私たちがやっていることは、何年か経ったときに子ども達に川の風景を思い出してもらえような『原風景づくり』なのかもしれませんね。河川は自然を感じられる場所であると同時に、水害などの問題と直結しています。自然を守りたいという思いもありつつ、では開発整備はしなくてもいいのかといえ、そこは簡単に答えを出すことのできない問題です。子ども達にも、本来あるべき川の姿は何かを考えてほしいし、解決策と一緒に考えていってほしい。そのためにはまず知ることが大事です。子ども達と一緒に活動しながら、自分自身でも答えを考え続けていきたいと思います。」

また河川財団さんへの希望なのですが、学校支援、

川づくり団体支援と両方ありますが、発表の場などはそれぞれ別ですよ。学校と、地域の川に関わる人たちとの交流できる場がもつとあるといいなと思っています。学校とは閉じた社会ではなくて、地域の人たちと考える学校になっていく必要があるし、川づくりに関わる大人たちにも子ども達を受け入れてもらいたい。もつと気軽に連携や交流ができるようになると、川を取り巻く環境は、よりよくなっていくような気がします」(羽澄さん)

※「水辺の楽校」：地域の身近な水辺における環境学習や自然体験活動を推進するため、国土交通省、文部科学省、環境省の3省が連携している『子どもの水辺』再発見プロジェクトの一環。子どもが安全に水辺に近づけ、環境学習や地域交流などの活動を推進するために必要な、親水護岸などのハード整備を「水辺の楽校」プロジェクトとして国土交通省が実施し支援している。

## 河川財団よりひとこと

先生方ご自身が川や自然の美しさに感動することや自然に身を置くことの気持ち良さを感じ、そしてそれを子どもたちと共感する。また、大変な活動をやりきる度に人との繋がりが広がり深まっていくことで、川の魅力が増え連光寺独自の学校文化が刻まれていく。連光寺小学校で河川教育が長年続いている理由が分かりました。

# TOPICS

2022年度

## 「河川基金」助成の募集を開始

**募集期間** 2021年(令和3年)  
10月1日(金)～11月15日(月)

**申請方法** インターネットによるオンラインで申請してください。  
※詳細につきましては河川財団ホームページにてお知らせいたします。

[www.kasen.or.jp](http://www.kasen.or.jp)

河川基金

検索

### 河川基金助成の3つの部門

#### 1. 研究者・研究機関部門

防災・減災や河川・流域の視点から、治水・利水・環境に関する新たな科学的知見を得る取組みや新技術の開発に向けた調査・研究を行う、大学の研究者や研究機関等に助成を行っています。

2021年度:70件(約5,800万円)



【写真提供】九州大学院 教授 矢野真一郎様

#### 2. 川づくり団体部門

河川や流域への理解を深めることにより、川や流域をより健全な姿に変える、あるいは戻すための活動等を行う市民団体等(川づくり団体)に助成を行っています。

2021年度:60件(約5,400万円)

※新規採択のみ(新設川づくり団体の継続は含みません)



【写真提供】筑後川まるごと博物館

#### 3. 学校部門

学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する河川教育に取り組む小・中・高等学校に助成を行っています。

2021年度:100件(約2,100万円)



【写真提供】大崎市立古川第一小学校

## 2022年 助成一覧

【助成部門】	【助成対象者】	【助成区分】	【期間】	【助成金額】
研究者 ・ 研究機関	研究機関	一般的助成	1～2年	200万円 (上限)
		緊急災害調査	1年	300万円 (年度総額)
		学術図書出版助成	1年	100万円 (上限)
		アウトリーチ活動A	1～2年	200万円 (上限)
	一般的研究	一般的助成 (60歳未満の研究者)	1～2年	100万円 (定額)
		学術図書出版助成	1年	100万円 (上限)
		アウトリーチ活動B	1～2年	100万円 (上限)
	若手研究者 (35歳以下)	若手研究者 (35歳以下の研究者)	1～2年	60万円 (定額)
	ジュニア研究者 (クラブ活動)	高校のクラブ活動	1年	30万円 (定額)
		中学のクラブ活動	1年	20万円 (定額)
川づくり 団体	流域川づくり団体	活動A	1年	100万円 (定額)
		活動B	1年	60万円 (定額)
		活動C	1年	30万円 (定額)
	全国川づくり団体	活動A	1年	500万円 (上限)
		活動B	1年	100万円 (上限)
	新設川づくり団体	新設川づくり団体自立支援助成	1～5年	毎年50万円 (定額)
学校	幼稚園、保育所、 認定こども園等	幼稚園、保育所、 認定こども園等	1年	10万円 (定額)
		河川教育に関する実践的研究	1年	50万円 (定額)
	小、中、高等学校、 特別支援学校等	河川教育とりくみ支援	1年	10万円 (定額)
		単学年	1年	20万円 (定額)
		複数学年	1年	40万円 (定額)
		河川教育に関する実践的研究	1年	50万円 (定額)

※中学校・高等学校におけるクラブ活動は、「研究者・研究機関部門」のジュニア研究者(クラブ活動)へご応募いただけます。

※助成金額欄に(上限)と表記されている助成区分については、河川財団において申請金額を査定した上で助成額を決定します。

## 2022年度（令和4年度） 河川基金助成事業の募集にあたって

次年度の募集にあたり、河川基金助成事業の流れ、近年の申請 / 採択の状況、募集要項の主な変更点、その他の話題についてご紹介いたします。  
申請にあたり参考にさせていただき、皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

### 河川基金助成事業の流れ

助成事業の流れを図-1に示します。10月1日より募集を開始し、選考委員会による厳正な審査の上、年度末まで採否の結果を通知させていただきます。次年度に活動を行っていただき、結果報告は4月末までをお願いします。なお、活動に必要な経費は前払いすることも可能です。また、活動成果につきましては、発表会で紹介していただくとともに、優秀な成果につきましては、表彰させていただいております。

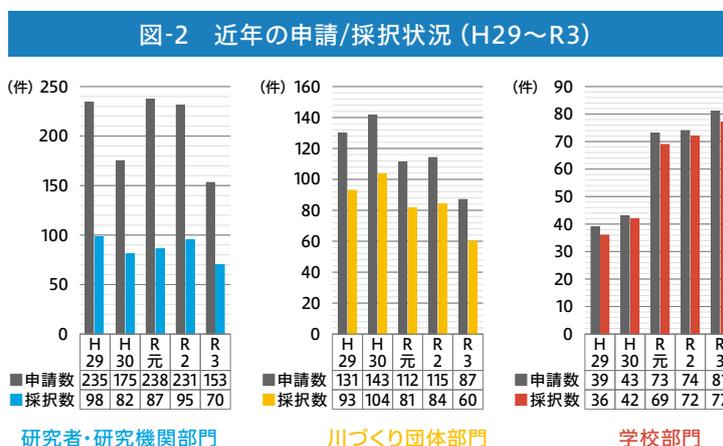
図-1 河川基金助成事業の流れ（2022年度）



### 近年の申請/ 採択の状況について

過去5年間の申請と採択の状況を図-2に示します。採択率は、学校部門、川づくり団体部門、研究者・研究機関部門の順に高い状況になりました。なお、令和3年度は、研究者・研究機関部門及び川づくり団体部門では例年に比べ申請者数が少なくなりました。新型コロナウイルス感染症の影響により、活動が制約されてしまったためと思われる。

図-2 近年の申請/採択状況（H29～R3）



※学校部門における春の募集は含めていません。

## 今回の募集要項の主な変更点について

より申請者目線に立ち、分かりやすい内容となるような改善（共通）

具体的には次のような改善を図りました。

- ① 募集要項に申請～採択～活動～発表会までの一連の流れを掲載
- ② 添付しなければならない書類について、申請しようとする助成区分毎に整理
- ③ 申請にあたり記入していただく各書類の様式を掲載  
（実際はWEB上で入力していただきますので、入力にあたっての参考としてください）。

アウトリーチ活動の変更（研究者・研究機関部門）

次のような視点を踏まえて、申請の際の記載事項の見直しを図りました。

- ① 調査・研究成果の普及を図るとい趣旨を明確にするとともに成果の内容を重視する
- ② 一般市民、特に次世代の参加を促す方を重視する
- ③ 前回の活動内容や成果からの進歩・発展を重視する

また、丁寧に普及を図るための準備期間が確保できるよう2年助成を認める、実績のない活動Cは廃止する、活動の効果や実効性を踏まえた助成額とできるよう、活動A、Bとも助成金額の査定がある「上限」とすることとしました。

新型コロナウイルス感染症対応（共通）

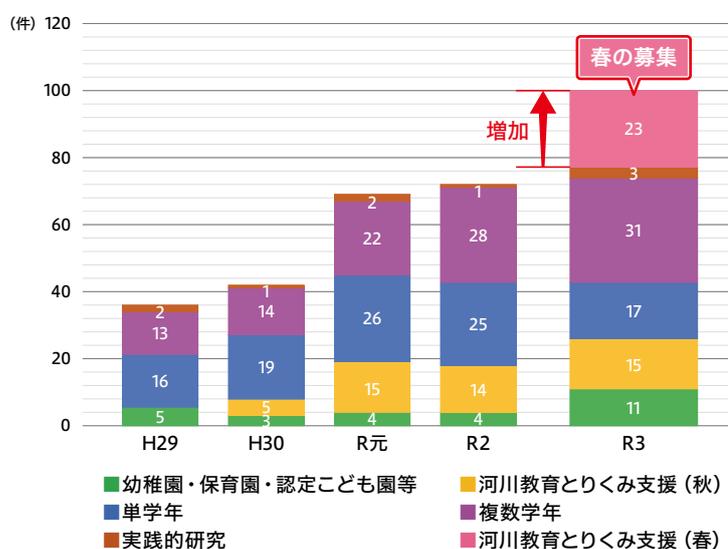
今年度も新型コロナウィルの感染症の状況は大きく改善されていないことから、引き続き活動期間を次年度まで延長する特別措置を認める予定です。ただし、助成決定後の期間の変更は原則できない中での特別措置であることから、再延長は認められませんので、要項にその旨明記しました。

以上が、主な変更事項です。今後も皆様の意見・要望等を踏まえつつ、活用しやすい助成事業に改善していきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

## 従来の募集(秋)に加え 初めて「春の募集」 を行いました

河川基金助成事業の募集につきましては、これまで秋（10月～11月）に募集していましたが、先生の異動がある学校部門につきましては、新体制での応募に配慮して、4月にも募集を行いました（「春の募集」と称することとしました）。おかげさまで、多くの学校から申請をいただきました（図-3）。今後も継続していく予定ですので、よろしくお願いします。

図-3 採択数の推移（学校部門）





2022年度

## 河川財団賞および河川財団奨励賞 の募集を開始

河川財団では、河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果をもとに、学会等に論文として発表することにより学術的・社会的に評価された研究実績や、研究成果を実用化させ、大きく社会に貢献・活用されていると認められる技術を開発するなど、河川・流域の視点から防災・減災の取り組みや水資源の利用の合理化、河川環境の保全等に関して卓越した功績を上げた助成研究者を表彰しています。



河川基金

賞の名称	対象	副賞 (研究奨励金)
河川財団賞	特に卓越した功績が認められた助成研究者	50万円
河川財団奨励賞	今後の活躍が期待される、優秀な若手助成研究者	20万円

※「若手助成研究者」とは、助成年度の年度末(当該年の3月31日時点)において満35歳以下の助成研究者をいいます。

### 表彰の分野

#### 【学術貢献分野】

河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果をもとに、学会等に論文を発表し、学術的・社会的に評価された研究業績により、河川・流域の視点から防災・減災の取り組み、水資源の利用の合理化、河川環境の保全等に関する学術の進歩・発展に顕著な貢献をなしたと認められる助成研究者を表彰します。

対象者：過去5年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者

#### 【技術開発分野】

河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果を、河川等の現場での実践を通じて、防災・減災の取り組み、水資源の利用の合理化、河川環境の保全等の推進に寄与する技術を開発・実用化し、大きく社会に貢献したと認められる助成研究者・研究機関を表彰します。

対象者：過去10年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者または研究機関

### 募集期間

2021年(令和3年)

10月1日(金)～12月15日(水)

詳細は、河川財団 HP でご確認ください。

www.kasen.or.jp

河川基金

検索

# 2022年度（令和4年度） 河川美化・緑化事業の 募集を開始

地域の皆様の多様な活動にきめ細かく対応できる  
事業制度となっています。  
積極的な応募を期待します。

募集  
期間

2021年（令和3年）

10月1日（金）～11月30日（火）

申請  
方法

募集要項は河川財団 HP に掲載しています。

<https://www.kasen.or.jp/jyosei/tabid59.html>

河川財団 河川美化・緑化事業 検索

申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、  
右記の申請受付専用メールアドレスに送付してください。



ggg-shinsei@kasen.or.jp

## 助成コース

活動規模により4つのコースを設定しています。

- 「活動A」コース …………… 20万円（定額）
- 「活動B」コース …………… 10万円（定額）
- 「活動C」コース …………… 5万円（定額）
- 「大規模植樹・植栽」コース …… 100万円（上限）

## 助成の対象

河川及びその近傍における次のような活動が助成の対象となります。

- イ) 河川の美化（河川清掃活動、花壇の整備等）
- ロ) 河川の健全な緑化（植樹・植栽、植生管理等）
- ハ) 河川の環境改善・保全・防災等（外来種（植物）駆除、樹木伐採、除草・草刈、川の多自然化・浄化等）

## <河川美化・緑化事業とは>

公益財団法人河川財団と公益社団法人ゴルフ  
緑化促進会（略称GGG）とが連携し、国民生活を  
とりまく環境の緑化推進の一環として行っている  
取り組みです。ゴルファーの皆様から頂いた協力金  
（「緑化協力金」といいます。）を元に、河川等に

における美化、健全な緑化、環境改善・保全・防災等  
の活動に対し助成を推進し、河川環境の向上を図  
り、緑化協力金の理解促進に寄与しようとするもの  
です。

INTERVIEW  
1  
川づくり団体  
部門

# 川のアクティブラーニング 〜ESD（持続可能な開発のための教育）で 取り組む「川の学び方」〜 | e-plus 生涯学習研究所 |



国営公園「木曽川水園」での学外授業

知識と体験を組み合わせた水環境学習のプログラムを作成、実施することで、子どもたちの主体的な学びを促す活動を続ける「e-plus 生涯学習研究所」。代表を務める小林由紀子さんに、水環境教育に携わるようになった経緯や、子どもたちが川での体験をしながら学ぶことの大切さについて、お話を伺いました。



## プロフィール

e-plus生涯学習研究所  
代表

### 小林由紀子さん

1977年 東京女子大学文理学部社会学科卒業  
2002年 (財)省エネルギーセンター東海北陸地区省エネルギー  
モデル校専門員  
2012年 国立大学法人岐阜大学  
未来型太陽光発電システム研究センター特定研究補佐員  
2014年 国立大学法人岐阜大学 地域協学センター特任准教授  
2016年 岐阜県環境教育推進員

PTAの環境の担当の役員になったことから環境教育に興味を持ち、地域で環境をテーマにエコクラブ活動を10年間続ける。その後、環境カウンセラーとしてe-plus 生涯学習研究所を立ち上げ、子どもたちに自然体験活動を含めた環境学習プログラムを提供している。



### いつでも、誰でもが学べる機会を作りたい

私たちが理念として「生涯学習」を掲げているのは、私自身、環境に興味を持ったのが40歳過ぎとすく遅かったからです。PTAで環境担当の役員になった時に、地球環境問題の詳細を知り、すく驚いたのです。その驚きのプロセスを誰かと共有して学ぶ場があれば、少しでも地球を救う助けになるのかもしれないと思いました。だからこそ、「どんな年齢の人でも、いつでも」学べる場を目指したいと考えています。

PTAでの経験で知った中で、3R（リデュース、リユース、リサイクル）のように生活の中で意識せずに行っている実践が地球温暖化防止に寄与する一方、危機を感じたのは生活排水が知らないうちに川や海の汚れに直結してしまうということでした。そこで主婦仲間環境についての勉強会をするようになりました。やがて子どもも入れて川や駅の清掃をするようになると地域の方からフリーマーケットなどで声をかけてもらうことが増えていく中で、ボランティアで環境授業をやってほしいという依頼も来るように。活動が本格化していったので、カウンセラー仲間と「環境教育のNPOを作ろう」という流れに。設立当初は、ヒマな時に活動できればいいかなぐらいの気持ちだったのですが、県や自治体から「あれやって、これやって」という多くの依頼がきたので、NPOって設立するとこんなに仕事が来るの?と驚きました。実はこの時、少しだけ代表になったことを後悔しました(笑)。

### 授業プログラムは打ち合わせが8割

環境教育において、いかに相手に伝わる言葉を使うかがとても大事だと思っています。専門家は、どうしても「正しく伝える」という

ことを重視します。もちろん正しさは大事ですが、子どもたちにとっては、方向性さえ合っていれば「いい加減」の方がいいこともあります。私たちは現在、小学校4、5年生や中学1年生を中心に授業プログラム作成していますが、学校と関わる中で、分かりやすく話をするこの大切さを強く実感しました。そのため「言葉が悪い」とか「この量を時間内に教えるのは無理だよ」とか文句を言うことも。遠慮しながらよりも、遠慮しない方が明らかにいい授業が出来上がります。どんなに能力の高い先生でも、打ち合わせをしないと的外してしまうことはやはりあります。メンバー同士で反省会をして「何年生に向けてどんな内容だったら受け入れられるのか」「何学期だったら大丈夫か」「理科と社会のリテラシーは？」などなど、かなり細かく話し合っていたように思います。

学校の先生の信頼を得るためにも打ち合わせは必須です。打ち合わせが仕事の8割といってもいいぐらい。どれぐらい時間がかかって、子どもたちが何を得られるようにするのかを理解していただき、お話をした内容はきちんと守る。だからやりたいことが伝わるまでは大変ですが、顔見知りの先生が増えた現在では、だいぶ楽になりました。

### 思い通りのプログラムに出合えた!

水環境学習に取り組むようになったのは、生活排水の授業をよく頼まれるようになったからです。岐阜県は水棲生物

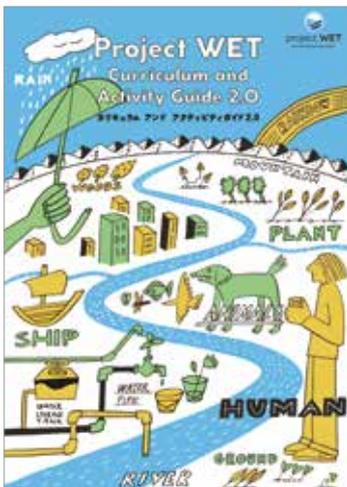


プロジェクトWETを代表するアクティビティ「驚異の旅」

調査の多いところだったので、調査体験の授業は多いです。でも知識を得る授業が少ないということで、最初はプログラムを作ってお渡ししていたのですが、「こんなふうにしてみたらどうですか」と実践してみると、結局そのままやることになることもありました。その中で「プロジェクトWET」(※)と初めて出合った時、「まあなんと私が望んでいたプログラムでしょう!」と感激しました(笑)。この経験を通して、より水環境の分野にはまってい



人の体にはどれぐらい水が含まれているかを学ぶ「アクアボディクイズ」



※プロジェクトWET：世界66以上の国と地域で活用されている体験型水教育プログラム。米国内で300人以上の資源管理者・科学者等により開発され、600人以上の教師と34,000人の生徒たちによってテストされた、「水」に関するたくさんの方のアクティビティが盛り込まれている。「驚異の旅」とは、自身が水の粒子となって、すごろくのように地球上のいろいろな場所を、かたちを変えて移動して水の循環を理解するアクティビティ。

きましたね。「驚異の旅」などのアクティビティを通して地球全体の水循環が分かると、生活排水のどの部分に自分が関わっているかが子どもたちにもビシッと分かるんです。空気がきれいじゃないと雨もきれいじゃないよね、という因果関係を理解してもらえないなど、本当にすごいと思います。調査体験と「驚異の旅」を組み合わせてみたら、毎年先生方に受け継がれるようになって、最初は2校ぐらいの依頼だったのが今は20校ぐらいになっていますね。

### 自分の住む地域を知り好きになってほしい

河川の環境授業をする際の目標は「子どもにも自分の地域を知って、好きになってほしい。誇りに思ってもらいたい」ということ。授業を始めた頃に感じたのが、川のこと、生き物のことも知らない子どもが、とても多いということでした。自分の地域を誇れない子どもが、地球環境を語るわけはないと思っただけです。この授業や体験を通して、地球環境を段階的に考え、「守る」ことの大事さに気が付いてくれればうれしいですね。私たちはそのきっかけづくりしかできませんが、私たちの世代ができなかった「地球環境を良くする」という行いを、今の子どもたちはきっと、自然に身につけることができると思っています。

でも、実は河川学習は、私が楽しくてやっていることなのです。楽しめば楽しむほど、子どもにも不思議と伝わるようです。だから楽しむことを優先に、これからはしっかりと伝わる授業を続けていきたいです。

## 今後取り組みたい研究やテーマ

今後考えていきたいことは2つあります。1つは「防災教育」をどうするのかという提案です。今は水環境教育でも気候変動の話に付随して、ゲリラ豪雨の話までは触れていますが、「水は怖いものでもあって、川が氾濫した際には自分で自分の身を守らなければいけない」という意識についてまでは伝えられていません。環境教育であることではないという意見もあるかもしれませんが、雨が降ったらなぜ川に近づいてはいけないのかという因果関係など、メカニズムを解説し、理解を促すことは必要だと思います。岐阜県はとても川が多い地域ですし、降雨量

を考えると防災の話は非常に大切なのに、いちばん大事なところが抜けていると感じています。ハザードマップや警報など、防災情報をどう活用するのか、ロードマップはどうなっているのか。ハード面ではなく、そういったソフト面での教育は、もっと行っていかなければと思っています。

そしてもうひとつは人材育成。私たちはe-plusのメンバーはリタイアしたり、ほかの組織で役職を持っていたりする人が多いので、若い世代で環境教育に携わる人をもっと増やしていきたいと思っています。熱意も興味もある人は多いのですが、どうしても進学、就職を経て、活動を続けられる人は減っていきがちです。実際にWETを活用した授業を体験すると「やってみたい」と言ってくれる方も多いので、今後はより一層、授業の魅力を伝え、知ってほしいと思っています。

多摩川・鶴見川の姿が語ってくれらるここと  
流れる水の働き・大地のつくりと  
その変化を追究する子どもたち  
―川崎市立井田小学校かなで分教室―



井田山・矢上川のまわり探検マップ(H.Fさんの作品)



ローカル教材や紙芝居など、教材も多様なものを使う(写真左下、右下)

川崎市・中原区の自然豊かな地域に位置する「川崎市立井田小学校かなで分教室」は、心理ケアが必要な子どもたちが学習する学び舎です。子どもたち自身の生活の場である「川崎の大地」と「多摩川の姿」を教材に、子ども一人ひとりの発達を支援する学習を行う本生拓郎室長と、渡邊正人先生に、かなで分教室が目指す教育について、お話を伺いました。



プロフィール

川崎市立井田小学校かなで分教室  
室長

本生拓郎さん

- 2011年 川崎市立さくら小学校 交流級及び共同学習(研究主任)
- 2016年 川崎市立井田小学校分教室 赴任
- 2020年 東北福祉大学社会福祉学科 修了

通常の学級・特別支援学級担任、重度重複学級担任。どのような場であっても、その子どもに見合った学びができるように福祉の視点も入れて実践している。

## 本人の学ぶ意欲をとともに探っていく

この「かなで分教室」という施設は、川崎市立井田小学校の分教室という位置付けです。保護者との関係不調などが理由で、親元で生活できなくなった子どもたちや、地元の学校へ通えない子どもたちの保護施設として、川崎市が約5年前に設置しました。施設全体が治療の場であり、施設内での生活すべてが子どもの健やかな成長を支える営み」という「総合環境療法」という立場をとっており、医学・心理治療や、生活指導、学校教育も並列し連携するという考え方をしています。

子どもたちの多くは、学習の未履修以前に日常生活体験が未習熟なため、かなで分教室では「体験を通して学ぶ」ことに重きを置いています。フィールドワークなどの体験型学習を行い、ひとりひとりの興味や得意分野を引き出すようなカリキュラムを作成しています。教材も Google Earth で川崎の大地や多摩川の姿を観察できるガイドン専用の資料「多摩川スカイナビゲーション」や、積層模型のパズル「川崎市立体パズル」、双眼実態顕微鏡で観察できる地層試料など、子どもたちに身近で臨地学習が可能なローカル教材を開発し活用しています。というのも、学習教材は学校へ来たくなるためのきっかけづくりの重要なアイテムのひとつです。

未履修の子の場合、何を入り口に学校に来ればいいのかわからないと思います。学校に行く意味が分からないから、行きたくないということになります。だからこそ、好きなこと、得意なこと、本人が興味を持ち、やってみたいと思うこと（＝ストレングス）を本人と一緒に探ることから始めていくのが大事です。そのために、私たちはひとり

ひとりに対し個別の指導計画を作成しています。学習の進み方だけでなく、本人が何に興味を持ち、何なら集中して取り組めるか。それはひとりひとり違います。さらに心理的安定のための目標もあるのです。オーダーメイドにその子の実態に合わせ進めていきます。やらなければいけないことを押し付けるのではなく、その子の学びたいという意欲を尊重するようにしています。でも、これは心理ケアが必要な子だけではなく、何かを学ぼうとする若若男女に共通することなのかな、とも考えられています。

## 自然という教材が学びを助ける

この施設がある川崎市中原区の井田山あたりはかなり自然が残っているところです。生物もクモがいたり、ヤモリがいたり、トカゲがいたり、植物もたくさん。江川せせらぎ遊歩道をはじめ、緑地、矢上川右岸、中原区市民健康の森（湧水池）、1時間ほどのコースでも豊かな自然と出合えます。子どもたちにとっては、これらの場所が、学びと発見の宝庫になっているのです。耳を澄まし、触れることのできる自然という教材は、子どもたちに尊い学びをもたらすとともに、生活経験の糧ともなります。

子どもたちの中には野菜を育てている子もいます。またそれを本当にうれしそうに調理し、美味しそうに喜んで食べるんです。こういう行動や体験のひとつひとつが、子どもにとってかけがえのない経験となり健やかな成長の支えになっていると感じています。

手足を動かしての活動が、この子たちの心理的

な安定につながるようにと考えているので、フィールドワークができる子は、実際に河川や地形を見に行ってもらいます。そうではない子も、簡易流水実験装置を操作し、河床の勾配や雨量などの条件をコントロールする実験を行い流水の働きを知ってもらうことで、ひとつでも多くの理科学的な見方や考え方を得られるように工夫しています。

中でも「水」というのは、とても貴重な自然の姿です。敷地内にある大きな盛土でさえ、雨が降ることで斜面に小さな水の流れができ、やがてその



多摩川宙瞰図(©神奈川県立生命の星・地球博物館改変)



地層の中の火山灰土を観察

**科学的な見方は物事を照らす  
灯火(ともしび)になる**

多摩川の姿を通して科学の基礎的な見方、考え方を育成する理由として、彼らにとつて、学びが道具になってくれたらという思いがあるからです。アニメ映画『天空の城ラピュタ』の主題歌に「君を

水は排水溝へと集まっていく。その様子を観察し、「水は高い所から低い所へ流れる」と推察することができる。雨上がりの日でも、雨が運んだ木の葉から運搬・堆積という働きを感得することができる。私自身も水については未知なことが多いので、子どもと一緒にたづねて探究しています。



「こんにちは 矢上川のカワセミ君」

のせて」という曲があります。「さあでかけよう、ひとときのパン、ナイフ、ランプ、かばんにつめこんで」という歌詞の「ランプ」とは、科学的な見方・考え方のことではないかと思うんです。「今起きてくることの原因は何?」と考えられるようになること。理科学的な見方・考え方が、物事を照らすランプの灯火(ともしび)のようになってくれば地震が起きた時、昔なら「ナマズが騒いでいる(疑心暗鬼)となっていましたよね。でも現在は「プレート・テクトニクス理論」から「地下で起きる岩盤の(ずれ)により発生する現象」ということが分かっていきます。理由が分かると、

ただ「恐ろしいもの」ではなく、「理にかなったもの」となります。自然の理が見えてくる。それだけでも安心したり、次への歩み(防災)を進めていったりする生きる力のひとつとなるはず。分教室生活での学びがそういう生活力になったら、これほどうれしいことはありません。

### ■ 河川教育に携わった教職員 (敬称略)

松原晴美 (川崎市立井田小学校長)

泉村美雪 (川崎市立井田小学校教頭)

高橋麗子 (川崎市立井田小学校教務主任)

中原義郎 (川崎市立田島小学校長)  
(川崎市立井田小学校前校長)

中川正彦 (川崎市立西有馬小学校教頭)  
(川崎市立井田小学校前教頭)

根岸朋子 (川崎市立幸町小学校総括教職員)  
(川崎市立井田小学校分教室前室長)

小林政代 (川崎市立子母口小学校総括教職員)  
(川崎市立井田小学校分教室前教職員)

本生拓郎 (川崎市立井田小学校分教室室長)

清水弥生 (川崎市立井田小学校分教室総括教職員)

細井真寿美 (川崎市立井田小学校分教室教職員)

荒井尚子 (川崎市立井田小学校分教室教職員)

渡邊正人 (川崎市立井田小学校分教室教職員)

## 今後取り組みたい 研究やテーマ

かなで分教室は開設して5年経ちますが、もちろん思うようにいかないこともたくさんありました。通常、学習は積み重ね、つまりグラフでいうならば右肩上がりが良いとされるものです。一方心理ケアにおいては「現状維持」することが大切です。子どもたちに対して、まずは心理の安定を目指しつつ、学習の積み重ねという成長グラフとどうバランスをとっていくのか。ここについては模索が必要な

部分もあると感じます。今のところは科学的な見方・考え方の一端にふれる、つまり「自然に親しむ」ということにしっかりと時間を取ること、それが理数系の基礎となっていけばいいと考えています。

ここでの教育を通じ福祉を学ぶ中で、教育と福祉はもっとオーバーラップしていかないと強くなるようになりました。特別にケアが必要な子でなくても、ネグレクトや孤食といった事態が普通に起こっています。子ども自身にとっては受難の時代だとも言えます。教育を学ぶ上で、カリキュラムに福祉の視点を取り入れていくべきではないかなとも、個人的には考えています。

INTERVIEW

研究・研究機関  
部門

— 京都大学防災研究所 —

# 水害が過疎化の進展に及ぼす 影響の解明



過疎地において水害後放置された神社の参道の橋



西日本豪雨において水害の影響を受けた岡山県真備町の住宅(写真左下、右下)

近年頻発している地域における水害。これによって短期的に起きた人的被害や建物被害については多く調査されているものの、長期的にどのような影響が生じているのかは、あまり調査されていないのが現状です。過疎が進む地域において、水害はその後どのように人の流れに影響するのかについて調査・研究を行った京都大学・渡部哲史先生に、研究で見えてきた課題について、お話を伺いました。



## プロフィール

京都大学防災研究所 特定准教授  
(助成時:東京大学大学院工学系研究科 特任講師)

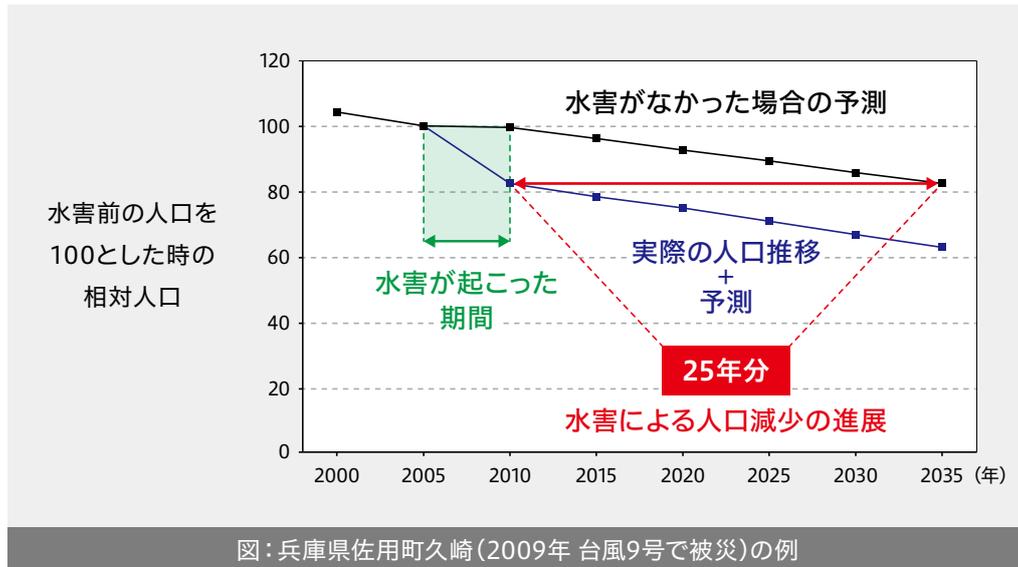
## 渡部哲史さん

2012年 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 修了  
2012-2018年 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構 助教  
2018-2021年 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 特任講師  
2021年-現在 京都大学防災研究所 特定准教授

愛媛県生まれ。気候や社会の変化が河川、流域、国、地球に及ぼす変化やその影響に関する研究を行っている。研究の社会実装に向けて、学際融合、学官民による超学際研究の実践に挑戦している。

### 定量的に影響を示すことの意味

「水害が過疎に影響を及ぼすか？」と聞かれたら「はい」と答える人は多いと思います。ただそれについて客観的な裏付けを取ろうとするとなかなか難しいと思います。実際にはどうなのかを定量的、客観的に提示することが今回の研究の目的でした。私がこれまで主に行ってきた研究は、「気候変動によって水害リスクがどう変わるか」といっ



図：兵庫県佐用町久崎(2009年 台風9号で被災)の例

水害の発生によって、過疎化が22年進んだ結果の例。

た水文学の分野なので、どちらかというと被害そのものよりも被害をもたらす要因の分析が中心でした。しかし、過疎化をはじめとした地方が置かれている現状や、地方の自然環境の将来に関して漠然とした興味は持ち続けていてこの研究に取り組みました。

今回のテーマを調べたいと思い始めたきっかけは、学生時代の2009年に遡ります。当時は水害による人的被害が現在と比べると少ない時期でした。しかしこの年、兵庫県の佐用町で台風による水害で多くの方が亡くなりました。その際にすぐ現地に入って、どういうところで被害が起こったかを調査したことをきっかけとして、「中山間地の集落が抱える問題」を考えようという研究グループも立ち上がりました。水害が起こった直後

というのは非常にたくさんの方が入りますが、年数が経つとどうしても次の災害に目が向いてしまう。時とともに調査が風化してしまうのはどうなのかという問題意識がそこで生まれました。短期的な被害は分かっても、影響が長期化していたらそれは目に見えない。その見えないものを調査したいと考えたのが、この研究を始める契機となりました。

### 客観的に割り出せないものを客観的に提示する

佐用町の事例で分かったのですが、町単位で調査をしていても、水害の影響というのは見えにくいものです。そもそも水害が起きていなくても人口が減少しているのが、水害の影響が有意な変化なのかどうかを捉えるのが難しい上、過疎地域は市町村合併の影響があって、ひとつの市町村がか

なりの範囲をカバーしています。でも水害は局所的な影響ですから、ひとつの集落で起こったとしても、市町村単位の統計ではその影響は明確ではないのです。また、災害研究の多くは、被害「率」ではなくて「被害」で見ることが多いと思います。死者・行方不明者がトータルでどのぐらいの規模なのかというようなく、でもこの研究では、そういう大きな事柄ではなく、もっと小さく見えないもの。しかし長く影響を与えるものに光を当てたかったのです。

これらの経験から、この調査は先行研究とは見方を変える必要があると考えました。災害の全体の大きさではなく集落スケールでの水害の影響が大きい地域を割り出すために、「市町村の一般資産総額のうち、一般資産被害額が占める割合を算出する」という手法を取りました。その「相対被害率」算出の結果、1位になったのは2010年の長野県青木村で起きた梅雨前線による災害。空間的に小規模で、世間からの注目は必ずしも大きくなかったものの、現地では大きな影響を生じさせたことが、この統計から推し量ることができると思います。これらの地域において、「従来の社会変化のみから予測される人口」と「水害が起きた」実際の人口の比較をしました。すると、水害が起きていない場合の人口減少よりも、10〜25年ほどスピードが速まっていると結果が得られました。被害の全体は小さくても、その地域では10年、20年も時計を早めるような影響をその土地に及ぼしている。この10年、20年は過疎の進む地域ではとても大きいです。一見もとに戻ったとしても、そこには戻しようのない変化が起き

ています。それを明らかにすることで、災害に対する記憶の風化を、少しでも抑えていけたら。その思いも、研究のモチベーションになっていったと思います。

### 研究を通じて地域に貢献したい

私の両親は、平日は勤めをしながら、週末は農業をするという典型的な兼業農家でした。それを見ていて分かったのは、農業は儲けるためにやっているのではなく、土地を守るためにやっているということです。もちろん食糧にはなりますが、機械代などの経費を引いたらほぼプラスマイナス0というところ。週末に働いて収益ナシというのはどうなんだろうと思いつつ、でもそういう人のおかげで、守られている環境があると思うのです。稲作をすれば溜め池や水位を守り、結果として河川を守ることにもなっていく。そういう人の働きが報われるといいなと考えました。日本という国土を考えた時、もちろん東京などの大都市には経済的に回して、発展させていくという大事な役割はあると思います。でも金銭価値には換えられないとしても、豊かな国土や生態系を守ることに、その地域の人々の働きは役立っている。大都市に住んで、いろいろな人の暮らしを見れば見るほど、地域の人にもっと光を当てたい。そういうことに携わる研究をしたいと強く思うようになりました。

### これからの河川基金に望むこと

私たち世代の研究者は業績を残すために国際的な論文を書かなければいけないという強いプレッシャーがあります。もちろんそれは大切なことで

あると思う反面、それだけではいけないという思いもあります。河川基金に関しては、そういった評価軸ではなく、地域に役立つことが大事という観点を持っていてくれるのが、自分にはとても有難い存在でした。もちろんこの事例も、日本特有の課題として国際的に発表したいという思いはありますが、背景から理解してもらおうという意味ではなかなか時間がかかりそうなので……。

最初にお話した通り、今回助成をいただいた研究は、自分が本来やっているテーマとは少し違うので、今回の助成をきっかけに「そんなことやってたんだ」と知っていただけの機会になったのもとても良かったです。隣接するテーマではあるものの、自分の中でも河川研究は「お客さん」的な考えがどこかにあったと思います。この機会に堂々としてもいいのかなという気持ちが出てきました(笑)。研究者として、深く掘り下げることは大事なのはもちろんですが、私のように横に広げるといいう在り方もあっていいと考えています。これからも「こんな河川に対する考え方があったのか」という視点の研究を重視する場で在り続けていただければとても嬉しく思います。

## 今後取り組みたい研究やテーマ

都市と地方の関係については、これからも研究していきたいですね。今回、水害によって過疎化が進行するということが提示できましたが、では「人がいなくなると何が起こるのか」を環境面から調べていきたいと考えています。今回の研究でお話を聞いたり、事例を見たりといった中で、農業などの方法で土地に手を入れている方の多くは高齢であり、水害によってそれを辞めてしまう方も多い。河川や、その周辺の土地は、一般的に地形的な制約などから大規模な機械化が難しい。だから人がいな

くなるといち早く環境が悪くなる場所でもあります。河川の場合、それが災害のきっかけや災害の規模を大きくすることがあります。河川内の農地の問題は、人がいなくなることにおける特徴的な問題だと思います。

修士の頃、自分が研究者に進むか、就職するかを考えたとき、「地域に貢献したいのだったら、自分で事業を起こして地域にお金を落とすのがいちばん」と言われました。確かにそうなのですが、それで救えるのはひとつの地域だけ。結局成功の奪い合いになり、都市と地方の関係は同じままです。それよりもっと根本的な何かができないか。それができるのは研究者なのではないかと考えました。その初心を忘れず、これからも研究を続けていきたいと考えています。

## ご寄付の御礼

令和3年4月1日から令和3年9月30日までの半年に、「一般財団法人 宮崎大淀川スポーツセンター様」や「稲葉 浩一様」をはじめとする、団体や個人の皆様から6,164,128円のご寄附をいただきました。寄付者の皆様に心より御礼申し上げます。

ご厚志につきましては、河川基金として管理し、

その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人 河川財団  
理事長 関 克己



## 河川基金へのご寄付について

我が国では、国土保全と国民生活の安定を図るため治水施設の整備と水資源の開発が進められ、我が国の発展を支えてきました。しかしながら、依然として水害は各地で発生し水不足の懸念は継続しているため、治水対策等の推進は重要です。「河川基金」は、昭和63年3月に設立

され、国や地方公共団体による河川整備と相まって、その効果を高めるための多様な調査研究や活動に助成してきています。このような河川基金の趣旨をご理解いただき、本基金のさらなる造成のために皆様のご協力をお願いします。

ご寄付のお手続きにクレジットカード決済を追加いたしました。

ご利用いただけるクレジットカードブランド



### 寄付金の税法上の優遇措置について

当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人」としての認定を受けております（認定日は平成25年3月21日、法人登記日は同年4月1日）ので、当財団への寄付金には上記の河川基金への寄付金

及び一般寄付金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。



河川基金

詳しくは… **河川基金 Web サイトへ!** (QRコードはコチラ ▶▶▶)

河川基金の詳細は、河川財団HPをご覧ください。また助成事業に関するイベント告知ページも設けています。助成を受けられている方はぜひご活用ください。

[www.kasen.or.jp/kikin/](http://www.kasen.or.jp/kikin/)



